

## 「百鬼夜行絵巻」考

—真珠庵本を中心に—

大北雅浩

「百鬼夜行絵巻真珠庵本」と呼ばれている絵巻物がしる。妖怪の行列を描いたものと言われながら、登場する妖怪はほとんどが器物の妖怪であり、恐ろしさはあまり伝わってこない。むしろ、滑稽ささえ感じられる。果たして、これは本当に「百鬼夜行を描いたものなのだろうか。この疑問から、「百鬼夜行絵巻」について考えてみることにした。

### 第一章 「百鬼夜行絵巻」とは

ここでは、真珠庵本を中心に、模本（東博本㉔）・大阪市立美術館本（大阪市美本）・異本（東博本㉕）・京都市立芸術大学本（京都市芸大本）の五巻を比較し、それらの位置づけについて考えた。

真珠庵本と東博本㉔を比較すると、真珠庵本の方が、彩色や筆致が優れているように感じられる。それゆえに真珠庵本よりも低く見られ、模本と呼ばれているのだが、東博本㉔には真珠庵本に登場しない妖怪も描かれている。さら

に真珠庵本においては、東博本と比較すると随所に描写の省略が見られる。仮に東博本が真珠庵本を原本としての模本であると考えた場合、東博本の方にこそ省略や写しもれがあつてしかるべきである。しかし実際には、真珠庵本の方に省略や写しもれが見られる。このことから、真珠庵本が東博本の原本であるというわけではなく、それぞれに何らかの原本が存在したものと思われる。

大阪市美本は、色彩や筆致が真珠庵本に酷似している。先にあげた、真珠庵本での省略が見られるなど、大阪市美本は真珠庵本の系列にあるものと考えられる。

東博本は一部しか残されていないのだが、そこに見られる妖怪のほとんどは京都市芸大本にも描かれているものと同じものである。

こういったことから、「百鬼夜行絵巻」諸本を二つのグループに分けた。一つは真珠庵本、東博本、大阪市美本のグループで、もう一つは東博本、京都市芸大本のグループである。

また、この二つのグループ間にも、同一の妖怪が描かれているといった共通点が見られることから、単純に二つに分けられるものではなく、何かしら共通の祖本が存在した可能性についても触れた。

## 第二章 百鬼夜行とは

「百鬼夜行」という言葉が多く見られるのは、主に平安時代の物語集である。ここでは、それら物語集の中の百鬼夜行に関する描写を引き、百鬼夜行の特徴をまとめた。

- 一、深夜に集団で火を灯し、大声で騒ぎながら出現する。
  - 二、手足の本数や目の数が人間とは異なるなど、異形の者たちである。
  - 三、出現する場所が特定して書かれている。
  - 四、陀羅尼によって難を逃れる事ができる。
- 真珠庵本を見ると、目が三つあるものや、いわゆる鬼の姿をしているものも描かれているが、それはごく一部である。また、物語の百鬼夜行の様子には、「器物の妖怪」ということは一切触れられていない。このことから、物語集の百鬼夜行と真珠庵本には隔たりがあるものと思われる。

### 第三章 付喪神について

「百鬼夜行絵巻」に多く描かれている器物の妖怪たちを、一般に「付喪神」と呼ぶ。付喪神が初めて出現するのは、室町時代に成立した『付喪神記』であると言われている。

ここでは、中世における手工業の発展、器物の流通などを挙げ、付喪神出現の背景について考えた。また、『七十一番職人歌合』という史料を挙げ、中世に職人たちが台頭してきたことも述べた。

#### 第四章 「再び「百鬼夜行絵巻」とは

これまでにはつきりしたことは、真珠庵本は物語集に登場する百鬼夜行を絵画化したものではないという事実である。それでは、真珠庵本とは、一体、いつ、誰が、何を描いたものなるだろうか。

誰がという点については、土佐光信筆という伝承がある。しかし、真珠庵本で妖怪を描いている線と光信の作品で描かれている線を比較し、真珠庵本は光信の作品ではないという結論に至った。

第三章において、付喪神の出現時期を中世であると結論付けた。したがって、付喪神が多く登場する真珠庵本は、中世以降の成立であるということになる。現在、通説として真珠庵本の成立は室町時代と言われているから、これも矛盾するものではない。

注目したのは、真珠庵本に描かれた鍋の妖怪である。ここでは、この鍋を、仮に「真珠庵本型鍋」と名づけることにする。真珠庵本型鍋の特徴は、取っ手などの持つ部分がついていない点と、鍋底に突起がついている点である。この特徴を持つ鍋を探すと、中世の絵巻物の中には多く見られる。しかし、近世の絵画の中には、異なった形の鍋が描かれている。こういったことから、真珠庵本は中世、鎌倉時代から室町時代の頃に製作されたものだと、ここでは結論付けた。

何を描いたものかということについて、田中貴子氏は付喪神の祭礼行列ではないかと述べている。しかし、真珠庵本には神輿も山も描かれていないため、祭礼行列であるという印象は薄い。

第三章で述べたように、中世においては職人たちが台頭してきた。同時期に製作された真珠庵本は、職人の姿を描

いたものではないかとも考えた。しかし、職人らしい様子を描いているわけではないので、これも、決め手を欠く。

もう一つ考えられるのは、田楽のパロディではないかということではないかということである。中世には、田楽が流行し、何度か爆発的な流行が記録にも残っている。このことから、田楽に熱狂する人々の様子を、皮肉を込めて、妖怪化して描いたのが「百鬼夜行絵巻」ではないかと考えたのである。ただ、真珠庵本には、田楽であると特定できるものは描かれていない。東博本<sup>四</sup>には田楽の場面が描かれていることから、もし、第一章で触れたように、「百鬼夜行絵巻」諸本に共通の祖本であるとすれば、その成立に、田楽が関わっていると考えることもできるが、肝心の祖本に関する史料が存在しないため、現時点では不明である。

最後に視点を變えて、物語集が書かれた平安時代と、真珠庵本が制作された中世では、百鬼夜行に対する認識が異なっていたのではないかと考えてみた。そこで史料をあたってみると、中世においては、百鬼夜行という言葉の持つ意味が、広がっていたようである。そう考えると、真珠庵本は、中世の「百鬼夜行観」に基づいて制作された「百鬼夜行絵巻」であるとも言える。

### まとめ

この論文においては、「真珠庵本が何を描いたものか」ということに考察を加えるのが、第一の目的であった。そのことに関しては、結論を得られなかったまでも、いくつかの可能性を提示できたことには、自分なりに満足している。

しかし、付喪神の出現に文化史的な側面からアプローチしながら、思想史・宗教史に触れる余裕がなかったことが、反省点である。